

出身地 東京都江東区
 生年 一八七五（明治八）年十一月三十日
 没年 一九六九（昭和四十四）年十一月十一日

「反骨のジャーナリスト」と呼ばれ、名譽都民、文化勲章受章者として知られる長谷川如是閑（万次郎）が、本学の前身である東京法学院の邦語法学科を卒業したのは、一八九八（明治三十一年）七月、二十三歳の時であった。

本学との関係は八九年、英吉利法律学校付属英語予備校入学に始まる。同校が間もなく廃止となったため、東京英語学校へ通い、九三年七月、東京法学院英語法学科へ入学した。しかし家業の破産や病氣療養などのため休学、九六年九月に東京法学院邦語法学科二年級に編入し直した。如是閑の本学志望の理由は表向きは弁護士を目指してであったが、これは父親の意向によるもので、本人は新聞記者を目指して勉強していた。

卒業後も研究科に進学して研究を続けたが、一九〇三年、『日本』の記者となる。彼の『ある心の自叙伝』には、「法学院時代」の章があり、東京法学院の学生や教員の

様子が生き生きと描写されていて、当時の証言としても貴重である。

その後、大阪朝日新聞へ入社し、大正デモクラシー運動を先導するが、新聞紙法違反に問われた筆禍事件（白虹事件）の責任をとって退社した。これ以後は雑誌『我等』や『批判』などにより、国家主義やファシズムを鋭く批判し、戦後も幅広い言論活動を行っていた。

四八（昭和二十三）年、半世紀にわたって民主的思想の普及に貢献したとして文化勲章が授与された。また、五四年には東京都名譽都民に推薦された。

如是閑は、五五年、本学の創立七十周年記念式典で学員を代表して祝辞を述べた。―はるかに長い歴史を持つヨーロッパの大学と比べて、七〇年位は甚だ短く、子供が十歳まで生きたといってお祝いするのと同じでおかしい、日本の大学と比べ、ヨーロッパの大学は千年もかかってできた伝統が根をはっている。独自の伝統のでき

るように、学生自身が自らそういう伝統を作る母体になるべきで、そのためには学生が自治的に学校の伝統を生むような心と行動を培わなければならない、と説く内容であった。

本学は創立百周年に際し、この偉大な先輩ジャーナリストを記念して長谷川如是閑賞（学術・文化に関する論文募集）の贈呈、『長谷川如是閑―人・時代・思想と著作目録―』の刊行、「明治・大正・昭和三代を生きた大ジャーナリスト長谷川如是閑展」の開催に加えて、「連続公開講演会・長谷川如是閑」など一連の行事を行い、



長谷川如是閑

その業績を顕彰した。

彼の没後、書籍、版權、文化勲章をはじめ多くの関係資料が本学に寄贈された。その中に異色な物が一つ、大工道具がある。

如是閑の実家は祖父の代までは江戸城の城大工の棟梁の家であった。彼は書齋でその大工道具を使い手仕事をして頭を休めたという。その「作品」は下駄箱の修理からテーブルや火鉢にキャスターや台を作って移動しやすくしたり、火鉢の有毒ガスを避けるために煙突状の道具を付けるなど、工夫に満ちたものが多かった。

彼は六九年十一月、九十四歳の誕生日を目前に亡くなるが、解剖の結果は、「ふとい血管にはだいたいぶんアカがたまっていたが、細い血管は青年のようにきれいであった。脳ミソは案外軽かったが脳のヒダは非常に深かった」とのことだった。大工仕事は、数多くの著作を生み出した長谷川如是閑にとって、潤滑油の役割を果たしていたのだろうか。